

摂食行動におよぼす親子関係の影響

さくら い と よ こ
櫻井 登世子

〈要 旨〉

摂食障害の心的要因として、母子関係の問題が従来の研究により指摘されている。しかし、摂食障害を持つ患者は母子関係だけではなく、広く対人関係に歪みを生じていることが示され、対人関係において心理的不安や葛藤をかかえていることが明らかにされている。ポウルビーが示唆したように、親子関係は後の対人関係の形成に深く関わっており、自分自身の親子関係を肯定的に認識しているか、否定的に認識しているかということは社会に対する認識にも影響をおよぼすと考えられる。本研究では、対人関係の基になる親子関係を思春期の頃及び現在について調べ、親子関係が摂食行動にどのような影響をおよぼすのかについて検討した。母親との関係については「母子関係が摂食行動に影響をおよぼす」という従来からの知見を支持する結果が得られた。父親との関係については、性に対して非常に敏感になる思春期に、異性である父親を拒否する感情を抱き、自己の性的発達を否定したくなるような気持ちが、摂食行動に影響をおよぼすことが示された。

思春期の頃の母親との関係が摂食行動に影響をおよぼすことは従来の研究からも予想されたが、思春期のころの父親との関係も摂食行動に影響をおよぼすという結果は、今後の父子関係を考えていくうえで意義深く、今後更なる検討を重ねていくことが望まれる。

〈キーワード〉

摂食行動, 対人関係, 親子関係, アタッチメント, 思春期

はじめに

親子関係は対人関係の基になるものであり、大変重要な人間関係である。乳幼児期に親と子の間に安定した情緒的な絆が形成されると、子どもは後に経験する社会において「自分は社会に受け入れられる存在である」と認識するようになり、自分が出会う社会を信頼し、望ましい対人関係を形成していく。また、子どもが成長していく過程において、自分自身の親子関係を肯定的に認識しているか、あるいは否定的に認識しているかということは、様々な心身症に影響をおよぼすと考えられる。心身症は、身体の器質的、機能的な問

題に、心理的な要因が深く関わっており、ストレスや対人関係が影響することもある。心身症には摂食障害、遺尿症、身体表現性障害などがあるが、本研究では摂食障害と対人関係の基になる親子関係について焦点を当てていく。

摂食障害は思春期以降、特に女性に多く見られる心身症である。昨今、食育について関心が高まり、朝食をとることの望ましさ、食卓は家族団らんの場であることの再認識、孤食の問題など食に関する話題が多くみられる。現代の食に関する問題は対人関係の希薄さとも関連しており、摂食障害を引き起こすきっかけであるとも考えられる。摂食障害に関する研究によって作成された邦訳版食行動調査表を用いて摂食行動を調べ、対人関係の基になっている親子関係が摂食行動におよぼす影響について知見を得るために、研究を進めていく。

問題と目的

摂食障害は食行動に関する障害であり、「神経性無食欲症」（いわゆる「拒食症」）と「神経性大食症」（いわゆる「過食症」）とが含まれる。DSM-IV（アメリカ精神医学会、1994）による摂食障害の診断基準は以下のとおりである。

神経性無食欲症：A. 年齢や身長に対して正常範囲内よりも著しく低い体重（身長から期待される標準体重の85%以下の体重）を維持しようとする。B. やせていても肥満への強い恐怖心を持つ。C. 体重、体のサイズ、体型に対する感じ方に歪みがある（やせているのに太っていると主張し、もっとやせなければいけないと考える）。D. 連続3回以上の無月経になる。

神経性大食症：A. 多量の食物を短期間にとるようなことがしばしばある。B. 過食時に、摂食行動をコントロールできないという気持ちがある。C. 常に体重増加を防ぐために、自己誘発嘔吐、下痢や利尿薬の使用、厳格なダイエット、激しい運動を行う。D. 少なくとも3ヶ月以上、1週間に平均2回の過食を行う。E. 体型や体重への過度のこだわりが続いている。

摂食障害の出現率は、神経性無食欲症が0.5%～1%、神経性大食症が1～3%と報告されている。どちらの障害も90%以上が女性であり、思春期以後の若い女性に見られることが多い。神経性無食欲症（拒食症）と神経性大食症（過食症）の区別はそれほど明確にできるわけではなく、臨床像もかなり共通している。また、実際に拒食症から過食症へと移行するタイプも多い。摂食障害の原因はまだ十分に解明されていないが、身体的要因のほかに、心的要因が挙げられ、母子関係の問題が多くの研究によって指摘されている。

Thoma (1967) は、精神分析理論に基づき、摂食障害は、思春期に身体が著しく発達し変容する中で、成熟した女性性に直面することが困難なため心的後退を起こし、その結果として、幼児的情緒発達段階である口唇期に執着し、病態形成された症状であると述べ

た。また、石川ら（1960）は、摂食障害の患者とその母親との関係に注目した。その結果、患者の母親は、過保護で支配的である場合が多く、自分の理想とする欲求や感情を子どもに強く求め、患者はそんな母親を肯定的に受け入れられないにもかかわらず、母親に過度に依存しているという傾向が指摘された。梶山（1992）は、摂食障害患者の母子関係の特徴として母親の過干渉、患者の母親への依存、母子間の信頼関係の欠如をあげ、摂食障害の患者は幼児期から自己主張や自己決定ができず、親の言うことを聞くいわゆるよい子が多いと示唆している。小此木ら（1968）、馬場ら（1984）は、母親は患者に対して自己中心的な関わり方をし、温かい、愛情に満ちた母子関係が欠落していると指摘している。

摂食障害を持つ患者は母子関係だけではなく、広く対人関係に歪みを生じている傾向がある。乳幼児期の親子関係が、その後の対人関係に影響をおよぼすことが愛着の研究によって示されている。愛着（アタッチメント）とは、ある特定の対象との間に形成される愛情の絆として定義され、その絆は時間的にも空間的にも永続的に結びつき合うものとされている（小嶋，1981）。アタッチメントの概念を初めて取り上げたのは、ボウルビィ（Bowlby, 1958, 1969）であり、彼は、乳児はその初期から社会的対象への近接の動機があるとし、指しゃぶり、しがみつきの後追い、微笑などの生得的反応型が、生後1年間を通して、母親を焦点として統合され、母親に対するアタッチメントを編成すると述べている。久保田（1995）は、過去の親との関係を、現在どのように回想し、どのように認識しているかが、現在の対人関係における他者表象や自己表象にとって重要な意味をもつと述べている。たとえば、接触や助けを求めても拒否や嫌悪を示すようなアタッチメント人物（多くは母親）との相互作用を繰り返し経験する子どもは、“拒否的で情緒的応答性の乏しい、近づきがたい人物”という考えをアタッチメント人物に対して抱き、同時に“自分は助けを求めても応じられることなく、無力で、愛されるに値しない”という考えに至る。特に、機嫌の悪い態度で接近を拒否され、「よそに追い払う」と脅されることを繰り返し経験する子どもは、強い見捨てられるような不安を抱くようになり、親との関係以外の他の状況における恐怖にも著しく敏感になっていく。アタッチメント人物との関係は他者との関係にも般化していき、自分は両親から嫌われているだけでなく、他の誰からも望まれない存在であると確信するようになり、世界は何の慰めもなく、拒否的で、予測のつかないものと考えられるようになる。

反対に、安定したアタッチメント経験を得た子どもは、“求めるときは受容され、近づきやすく、情緒的に応答してくれる”と考えるようになり、同時に“自分は愛されるに値する、価値ある固有の存在である”と確信するようになる。この確信は他者や世界にまで般化し、母親の愛情に対する確信のみならず、他者からも愛されるに値すると確信し、いかなるときも自分に援助の手を差し伸べてくれる信頼できる人物の存在を信じ、このような無意識に近い確信と自信をもって世界に近づきながら、恐怖事態に際しても、信頼でき

る人に対し効果的に援助を求めつつ、的確に対処することができるのである。

ボウルビィは、「大人のパーソナリティは、未成熟な時期を通じての重要な人物たちとの相互作用，なかでもアタッチメント人物たちとの相互作用の所産とみなされる」と述べている。本研究では、将来の対人関係に深く関与するアタッチメント経験に焦点を当て、過去及び現在の母親及び父親との相互作用が青年期の摂食行動にどのような影響をおよぼしているのかについて検討し、先行研究で示されている母子関係と摂食行動との関連をより明らかにするだけでなく、父子関係が摂食行動にどのような影響をおよぼすのかについても考察する。

方 法

〈調査対象〉

神奈川県内の大学に通う女子大生135名であり、いずれも第1学年に所属しているものを対象とした。

〈質問紙〉

1. 摂食行動の問題傾向の測定

摂食行動の異常傾向を測定するために、Garner (1977) らが開発した Eating Attitudes Test (EAT) を新里 (1987) らが翻訳した邦訳版食行動調査表を使用した。この尺度は40項目からなり、3つの下位尺度（食事強迫、食事制限、肥満恐怖）で構成されている。食事強迫は「食後に罪悪感にさいなまれる」「食事が私の人生を左右（コントロール）している感じがする」などの項目で構成されており、食事制限は「糖分が多い食物は食べないようにしている」「食事に関するセルフコントロール（自己制御）をしている」などの項目で構成されている。肥満恐怖は「肥満になることが怖い」「体が細くなる（痩せる）ことに頭が一杯である」などの項目で構成されている。各質問項目への回答は「全くない＝1，たまに＝2，時々＝3，しばしば＝4，ひじょうにひんばん＝5，いつもそう＝6」の6段階評定とした。

2. 思春期の頃および現在の母親との関係に関する認識

思春期の頃（中学2，3年生の頃），および現在における母親との関係に関する認識を測定するために，久保田（1995）が作成した思春期の頃および現在の母親との関係に関する認識を測定する尺度を修正して使用した。各質問項目への回答は「全くあてはまらない＝1，かなりあてはまらない＝2，少しあてはまらない＝3，どちらともいえない＝4，少しあてはまる＝5，かなりあてはまる＝6，非常にあてはまる＝7」の7段階評定とした。

(1) 思春期の頃の認識

思春期の頃の認識に関する尺度は30項目からなり、4つの下位尺度（拒否、敬愛、侮蔑、依存）で構成されている。拒否は「母親がうっとうしくなった」「母親の愛情を素直に受け止められなかった」などの項目で構成されており、敬愛は「母親への感謝の念が起こった」「母親の人生に共感を覚えるようになった」などの項目で構成されている。侮蔑は「母親は私の機嫌をうかがっていた」「相談相手として母親は頼りなかった」などの項目で構成されており、依存は「母親の言うことをきいていれば間違いのないと思った」「母親以外に相談相手はいなかった」などの項目で構成されている。

(2) 現在の認識

現在の認識に関する尺度は29項目からなり、3つの下位尺度（愛着、依存、気づかい）で構成されている。愛着は「母親のことは考えたくない（逆転項目）」「母親をありがたいと思っている」などの項目で構成されており、依存は「母親だけは私の味方だと思う」「母親無しの生活は考えられない」などの項目で構成されている。気づかいは「母親には心配かけたくない」「母親にはいつまでも強くいてほしいと思う」などの項目で構成されている。

3. 思春期の頃および現在における父親との関係に関する認識の測定

父親との関係に関する認識を測定するために、久保田（1995）と同様に、母親との関係に関する認識を測定するために用いた質問紙の「母親」の表記を「父親」に修正して使用した。質問項目への回答は、母親との関係に関する認識と同様であり「全くあてはまらない」から「非常にあてはまる」までの7段階評定とした。

〈手続き〉

授業中に質問紙を配布し、集団で実施した。

結 果

1. 母親との関係に関する認識

母親との関係に関する認識について因子分析をしたところ、思春期、現在とも久保田（1995）の結果と同様であり、思春期の頃の母親との関係では「拒否」「敬愛」「侮蔑」「依存」の4因子が抽出された。現在の母親との関係では「愛着」「依存」「気づかい」の3因子が抽出された。

2. 父親との関係に関する認識

(1) 思春期の頃の父親との関係

思春期の頃における父親との関係に関する認識について因子分析を行った結果、表1に

表 1 思春期の頃の父親との関係に関する認識における 2 因子の構成項目と因子負荷量

〈項目〉	I	II
父親とは口をきくのも面倒だった	.768	
父親の世話になっていることが苦痛だった	.726	
父親を嫌うようになった	.720	
父親がいなければいいと思ったことがある	.706	
父親を恨むようになった	.683	
父親を恥ずかしいと思った	.648	
父親がうっとうしくなった	.643	
父親がつまらない人間に思えてきた	.619	
父親の愛情を素直に受けとめられなかった	.607	
父親と無縁になりたかった	.596	
父親の適当なあしらい方を心得た	.559	
父親のようになりたくないと思った	.524	
父親への甘えを拒否しようとした	.506	
<hr/>		
父親を尊敬するようになった		.806
父親への感謝の念がおこった		.669
自分に向けられる父親の愛を感じるようになった		.652
父親の人生を理解できるようになった		.646
父親の期待に応えようと努力した		.541
父親を一人の人間としてみるようになった		.539
父親のいうことをきいていれば間違いのないと思った		.535
父親は私を尊重してくれた		.533

示すように 2 因子が抽出された。第 I の因子は「父親とは口をきくのも面倒だった」「父親の世話になっていることが苦痛だった」「父親を嫌うようになった」などの項目で構成されており、これらは父親に対する拒否を表していると考えられるので、因子名を「拒否」と命名した。

第 II の因子は「父親を尊敬するようになった」「父親への感謝の念が起こった」「自分に向けられる父親の愛を感じるようになった」などの項目で構成されており、これらは父親との関係を肯定的にとらえていることを表していると考えられるので、因子名を「受容」と命名した。

表2 現在の父親との関係に関する認識における2因子の構成項目と因子負荷量

＜項目＞	I	II
父親とは心が通じ合っている	.759	
父親を好きだと言える	.717	
父親とのつながりの強さを感じる	.706	
父親を愛していると素直に言える	.662	
父親は一番の理解者だと思う	.658	
父親を裏切りたくない	.618	
父親だけは私の味方だと思う	.609	
父親の気持ちを理解したいと思う	.603	
父親孝行したい	.565	
父親に反対されると自信がなくなる	.565	
父親無しの生活は考えられない	.547	
父親には心配かけたくない	.502	
<hr/>		
父親にはうんざりしている		.807
父親のことは考えたくない		.772
父親を信用できない		.732
父親の事を考えると気分が沈む		.701
父親にはあまり接近したくない		.613
父親をまともに相手にする気になれない		.598
父親との間に崩しがたい壁がある		.559

(2) 現在の父親との関係

現在の父親との関係に関する認識について因子分析を行った結果、表2に示すように2因子が抽出された。第Iの因子は、「父親とは心が通じ合っている」「父親を好きだと言える」「父親とのつながりの強さを感じる」などの項目で構成されており、これらは父親との関係を肯定的にとらえ、父親を素直に受け入れ信頼していることを表していると考えられるので、因子名を「信頼」と命名した。

第IIの因子は、「父親にはうんざりしている」「父親のことは考えたくない」「父親を信用できない」などの項目で構成されており、これらは父親との関係を否定的にとらえ、父親を拒否していることを表していると考えられるので、因子名を「拒否」と命名した。

3. EATにおける下位尺度の得点化

表3に示すように、新里らによる邦訳版食行動調査表において抽出された3因子（食事強迫，食事制限，肥満恐怖）を構成する20項目に関して得点化し，下位尺度得点とした。下位尺度の平均と標準偏差を表4に示す。

表3 摂食行動の各尺度を構成する質問項目

尺 度	質問項目
食 事 強 迫	<p>食事の前になると、神経質になる</p> <p>お腹がすいたときには食事をしないようにしている</p> <p>食物のことで頭が一杯である</p> <p>食後に罪悪感にさいなまれる</p> <p>食事が私の人生を左右している感じがする</p> <p>他の人が私に、もっと食べるように、との圧力をかけている感じがする</p> <p>食物に関して時間をかけすぎたり、考えをめぐらしすぎるきらいがある</p> <p>食後に吐きたい衝動にかられる</p>
食 事 制 限	<p>自分が食べるもののカロリー量を知っている</p> <p>高炭水化物の食物は、特に食べないようにしている</p> <p>一日に数回体重を測定する</p> <p>運動するときには、カロリーの消費を考えてする</p> <p>糖分が高い食物は食べないようにしている</p> <p>ダイエット食を食べている</p> <p>食事に関するセルフコントロールをしている</p> <p>ダイエットをしている</p>
肥 満 恐 怖	<p>肥満になることが怖い</p> <p>体が細くなることに頭が一杯である</p> <p>自分の体に脂肪分がつきすぎていないか、との考えが頭から離れない</p> <p>甘い物を食べた後、気になる</p>

表4 摂食行動の各尺度得点の平均と標準偏差

尺 度	平 均	標準偏差
食 事 強 迫	17.95	6.60
食 事 制 限	18.70	7.08
肥 満 恐 怖	16.54	6.24

4. 摂食行動と母親との関係に関する認識との関連

摂食行動尺度の各下位尺度得点と母親との関係に関する認識との関連を調べるために、相関係数を求め表5に示した。

(1) 食事強迫との関連

摂食行動尺度の「食事強迫」は、思春期の頃の「侮蔑」、現在の「依存」と5%水準の正の相関がみられた。また、現在の「愛着」と5%水準の負の相関がみられた。

(2)食事制限との関連

摂食行動尺度の「食事制限」は、思春期の頃の「侮蔑」と5%水準の正の相関がみられた。

(3) 肥満恐怖との関連

摂食行動尺度の「肥満恐怖」は、思春期の頃の「侮蔑」「依存」、現在の「依存」「気づかい」と5%水準の正の相関がみられた。

表5 母親との関係に関する認識と摂食行動尺度の下位尺度との相関

		食事強迫	食事制限	肥満恐怖
思春期	拒否	.12	.07	.10
	敬愛	.09	.06	.06
	侮蔑	.24*	.19*	.21*
	依存	.13	.12	.15*
現在	愛着	-.16*	.04	.10
	依存	.15*	.04	.15*
	気づかい	-.05	.03	.14*

* : $p < .05$

5. 摂食行動と父親との関係に関する認識との関連

摂食行動尺度の各下位尺度得点と父親との関係に関する認識との関係を調べるために、相関係数を求め表6に示した。

表が示すように、摂食行動尺度の「食事強迫」「食事制限」「肥満恐怖」のいずれの下位尺度においても、思春期の頃の「拒否」と5%水準の正の相関がみられた。

表6 父親との関係に関する認識と摂食行動尺度の下位尺度との相関

		食事強迫	食事制限	肥満恐怖
思春期	拒否	.15*	.17*	.18*
	受容	.11	-.03	-.01
現在	受容	.05	.03	.07
	拒否	-.12	-.03	-.04

* : $p < .05$

考 察

1. 摂食行動におよぼす母親との関係の影響

摂食行動尺度の「食事強迫」は、思春期の頃の「侮蔑」、現在の「依存」と5%水準の正の相関がみられ、現在の「愛着」と5%水準の負の相関がみられた。また、摂食行動尺度の「食事制限」は、思春期の頃の「侮蔑」と5%水準の正の相関がみられ、「肥満恐怖」は、思春期の頃の「侮蔑」「依存」、現在の「依存」「気づかい」と5%水準の正の相関がみられた。本研究の結果は、石川ら（1960）が注目した摂食障害の患者とその母親との関係の分析結果を示唆していると考えられる。石川らは、摂食障害の患者の母親は過保護で支配的であり、患者も母親を肯定的に受け入れられないにもかかわらず、母親に依存していることを指摘したが、本研究でも母親との関係に関する認識において得られた「侮蔑」「依存」の因子が摂食行動に影響をおよぼしていることが示されたのである。思春期の頃の「侮蔑」は、「食事強迫」「食事制限」「肥満恐怖」の3因子すべてと正の相関を示している。思春期になり、今まで家族との関係が一番強かったが、徐々に友達との関係が大きなウェイトを占めるようになっていき、「母親はあてにならない」といったような感情が芽生えてくる。しかし、母親は自分にとって一番身近にいる「女性のモデル」であるため、成熟していく過程で依存したいという欲求が生じてくる。大人になるということは、母親から分離し、それと同時に、性的に成熟して自分の性を受け入れなければならないことを意味している。思春期は自立と依存が葛藤する時期であり、女性性の受け入れが困難であると摂食行動に問題を生じ、拒食症や過食症を引き起こすことになると思われる。

現在の母親との関係に関する認識の下位尺度である「気づかい」と摂食行動の下位尺度である「肥満恐怖」とのあいだに正の相関関係がみられたことは、自分の成熟した姿に母親が自分と同年齢であった頃をイメージするような場面や、それと反対に、自分の将来の姿を現在の母親の姿からイメージするような場면을繰り返し経験することによるのではないだろうか。

2. 摂食行動に及ぼす父親との関係の影響

摂食行動尺度の「食事強迫」「食事制限」「肥満恐怖」と、思春期における父親との関係に関する認識の下位尺度である「拒否」とのあいだに5%水準の正の相関がみられたことは、次のように考えられる。思春期に女性として成熟していく過程において、女性性の受け入れが困難であったり、男性性に敏感になっていたりということが、父親を拒否したいという気持ちにつながり、精神的に不安定になる。このことが、摂食行動に問題を生じさせているのではないだろうか。

現在の父親との関係に関する認識の下位尺度と摂食行動の下位尺度との間には有意な相

関関係がみられなかった。このことは、父親を肯定的に受け止め、信頼できるようになったことと関係があると思われる。

全体的考察

本研究では、将来の対人関係の基となるアタッチメント経験に焦点を当て、青年期の摂食行動におよぼす思春期および現在の親子関係の影響を検討した。

母親との関係に関する認識の下位尺度である「依存」が、思春期と現在のいずれにおいても摂食行動の下位尺度である「肥満恐怖」に影響をおよぼしていることが示された。また、思春期における母親との関係の下位尺度である「侮蔑」が、摂食行動の下位尺度である「食事強迫」「食事制限」「肥満恐怖」に影響をおよぼしていることが示された。これらの結果は、母親を肯定的に受け入れられないにもかかわらず、母親に依存していることが摂食行動に影響をおよぼすことを示しており、石川らの指摘を支持するものであった。現在の母親との関係に関する認識の下位尺度である「気づかい」が摂食行動の下位尺度である「肥満恐怖」に影響をおよぼすことも示された。

父親との関係に関する認識の下位尺度では、思春期の頃の「拒否」が、摂食行動の下位尺度である「食事強迫」「食事制限」「肥満恐怖」に影響をおよぼしていることが示された。

対人関係の基になっているアタッチメント人物である母親・父親との関係は、摂食行動に影響をおよぼしており、特に思春期の成熟の過程における親子関係が深く関わっていることが示された。思春期は、摂食行動に関する問題だけではなく、不登校や引きこもりなどの問題行動を生じやすい時期である。親からの自立と親への依存の葛藤の中で、友達関係が大きなウェイトを占めるようになっていき、家族関係が児童期よりも希薄に感じられる。しかし、本研究の結果からも明らかなように、思春期に親子がともに過ごす時間が物理的に短くても、親子関係の心理的結びつきは強いのではないかと考えられる。

父親よりも母親のほうが摂食行動に与える影響が大きかったのは、本研究の被験者が女性であり、やはり摂食行動には「成熟」との関連から同性の親の影響が大きいのであろう。父親との関係が摂食行動にどのような影響をおよぼすのかについて検討した研究は少なく、今後更なる検討を重ねていくことが望まれる。

参考文献

- アメリカ精神医学会 1994 高橋三郎・大野裕・染谷俊幸(訳) 1996 DSM-IV 精神疾患の診断・統計マニュアル 医学書院
- 馬場謙一・吉田直子 1984 Anorexia Nervosa 患者の家族力動の一考 臨床精神医学, 13, 1183-1189.

- Bowlby, J. 1958 The Nature of the child's tie to his mother. *International Journal of Psychoanalysis*, 39, 350-373.
- ボウルビィ, J. 1969 黒田実郎ほか (訳) 1976 母子関係の理論 I - 愛着行動 岩崎学術出版社
- Ganer, D. M., & Garifinkel, P. E. 1979 The Eating Attitudes Test: An Index of the Symptoms of anorexia nervosa. *Psychological Medicine*, 9, 273-279.
- 石川清・岩田由子・平野源一 1960 Anorexia Nervosa の症状と成因について *精神経誌*, 62, 1203-1221.
- 梶山有二 1992 思春期やせ症 *公衆衛生*, 57, 570-573.
- 小嶋謙四郎 1981 乳幼児の母子関係 医学書院
- 小此木啓吾・馬場謙一・馬場礼子, 他 1968 精神発達の見地から見た神経性食思不振症 *精神医学*, 8, 288-289.
- 久保木豊房・野村忍・末松弘行 1989 神経性食思不振症 *心身医学*, 29, 244-250.
- 久保田まり 1995 アタッチメントの研究 川島書店
- 新里里春・玉井一他 1986 邦訳版食行動調査表の開発およびその妥当性・信頼性の研究 *心身医学*, 26, 398-407.
- 桜井茂男・大川一郎 (編) 1999 しっかり学べる発達心理学 福村出版
- 桜井茂男・桜井登世子・松尾直博著 1999 子どもの福祉 福村出版
- Thoma, H. 1967 *Anorexia Nervosa* New York: Int Univ Press.
- 渡辺直樹 1995 家族関係の変遷と健康問題ー摂食障害の境界例を通してー *心身医学*, 35, 212-217.